

3 除菌数を増やすためにどのような取り組みが必要か

⑤ マスコミとの連携

浅井文和

日本医学ジャーナリスト協会 理事

国民的規模で *Helicobacter pylori* 除菌を進めるためにはマスコミとの連携が欠かせない。しかし、これまでの新聞報道を記事データベースで調べると、この分野の記事掲載件数は2001年以降、増えたり減ったりで継続的に国民向けの情報発信ができていないわけではない。今後、医療報道の要になる記者と連携し理解と協力を得ることが重要である。

はじめに

日本人の胃がんの大きな原因になっている *Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染。その除菌について国民の理解を得て前進させていくには、新聞などのマスコミと医療関係者との連携が欠かせない。これまでも新聞・雑誌・テレビなどの報道が除菌に一定の役割を果たしてきた面がある一方、必ずしも継続的な情報発信ができていない面もある。マスコミを通じた情報発信や国民の理解を得ることは簡単にできるのではなく、地道な努力が必要である。

筆者は1990年から2017年まで医学担当記者として新聞記事の執筆に従事してきた。*H. pylori* 除菌に関する記事もしばしば執筆した。本稿ではマスコミ報道の特徴を理解するために *H. pylori* に関する過去の新聞報道を振り返って分析する。さらに、医療関係者がマスコミと連携していくための方策を検討する。

PROFILE



Fumikazu Asai

あさい・ふみかず ●1981年京都大学理学部卒業。1983年同大学教育学部卒業。1983年朝日新聞社記者。2008年同社編集委員（医療担当）。2017年から東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻専門職学位課程（医療コミュニケーション学分野）。日本医学ジャーナリスト協会理事。【専門領域】ヘルスコミュニケーション、ヘルスリテラシー、ヘルスケアジャーナリズム

H. pyloriに関する新聞報道の変遷

1

*H. pylori*に関する記事が日本の新聞に登場するようになったのは1980年代後半からといえる。朝日新聞・毎日新聞・読売新聞の3紙で記事データベースを調査した結果、最初期の記事とみられるのは、1986年3月18日の朝日新聞東京本社版夕刊科学面に掲載された「日本でも胃かいよの菌？ 発見」という500文字ほどの短い記事だ。記事の冒頭を引用すると「胃かいよう、十二指腸かいよの犯人かも、と注目されている菌が、日本の患者からも見つかри、今春の日本細菌学会などで発表される。この菌は、カンピロバクター・パイロリディス菌。83年、オーストラリアのB・マーシャル博士たちが胃かいよう患者の胃粘膜から発見した。」という内容だ。

1988年6月17日付の読売新聞東京本社版夕刊に掲載された「胃・十二指腸カイヨウ ストレスばかりじゃない 病原菌も原因？」という記事では「最近、胃、十二指腸カイヨウの原因は、ストレスばかりでなく、カンピロバクター・パイロリという新しい病原菌も関係しているのではないかと注目されるようになってきた。」「今後、研究が進めば、胃ガン予防などに有効な成果が得られる可能性もある。」と書かれている。30年前の時点で未来を予想していた記事といえるだろう。

雑誌記事として火付け役になったのは1994年3月28日の週刊誌「AERA」の記事「僕の名前はピロリ、胃潰瘍の原因だぞ 感染症だったストレス病」であろう。このように、1990年代後半からは新聞や週刊誌にしばしば記事が掲載されるようになり、国民の間に「ピロリ菌」という言葉が浸透していくことになる。